30amG-109

病院実務実習における実習生の到達度自己評価に関する調査

○村上　勲[1], 渡部　多真紀[1], 中村　英里[1], 齋藤　百枝美[1], 渡辺　茂和[1],
土屋　雅勇[1], 栗原　順一[1]（[1]帝京大薬）

【目的】6 年制薬学部実務実習において、今後の病院実務実習をさらに充実させるための事前実習の改善を目的として、平成 22 年度から 3 年間における実習生の到達度自己評価に影響を与える要因について調査し、解析を行った。

【方法】平成 22～24 年度に最初の実務実習先が病院で、富士ゼロックス実務実習指導・管理システムを使用している病院実務実習施設（22 年度 34 施設、23 年度 39 施設、24 年度 43 施設）の実習生（22 年度 66 名、23 年度 81 名、24 年度 88 名）を対象とした。到達度評価は 3 段階（1.不十分、2.ある程度できる、3.十分できる）で行った。

【結果・考察】実習生の到達度自己評価点と指導薬剤師の評価点を比較すると、全ての項目において実習生の自己評価点（平均値 1.98～2.46）の方が指導薬剤師の評価点（平均値 2.38～2.60）に比べて有意に低値を示した（$p<0.05$）。このことより実習生と指導薬剤師との間に到達度に対する認識の違いが認められ、実習生は実習成果を、かならずしも実感できていない可能性が考えられる。実習生の自己評価点を男女別に比較すると、『薬剤を造る・調べる』の項目群において女性よりも男性の方が低値を示す傾向が認められ、特に「中毒医療への貢献」の項目では有意に低値を示した（$p<0.01$）。これは女性よりも男性の方が、これら項目群に関して苦手意識を持っている可能性が示唆された。病院実務実習施設の病床数（300 未満、300～500、500 以上）毎に比較すると、自己評価点は病床数 300～500 群が高値を示し、また施設の地域（神奈川、埼玉、千葉、東京）毎に比較すると、自己評価点は、神奈川＞埼玉＞千葉＞東京となる傾向が認められた。今後は、各評価点を参考にして、事前実習をより充実させる必要があると考えられる。